

『要塞の山城に立つ
正行公』

まさつらこう



大東市の東部にそびえる飯盛山には、戦国時代に畿内を治めた三好長慶の居城であった飯盛城跡が残されており、その山頂部分の「高檜郭」と呼ばれる場所に楠木正行の像が建立されています。

飯盛山の西のふもと、大東市北条から四條畷市南野にかけての一带は、南北朝時代の正平3(1348)年1月、南朝方の楠木正行と北朝方の高師直が、南北に縦断する東高野街道を主な舞台として戦った、四條繩手合戦の古戦場であったと考えられています。この銅像は、その合戦で討ち死にした正行をしのんで、昭和12年6月、小楠公会が中心となつて建てたもので、元東京美術学校教授黒岩淡哉氏によって製作されたも



飯盛山頂に建つ楠木正行像

のです。昭和18年の戦時中には供出されましたが、戦後、昭和47年に地元の篤志家によって再建されました。銅像は四條繩手合戦前に立ち寄った、吉野の如意輪堂の壁に辞世の句を書き終えた姿だといわれています。

戦場であったこの地域には、楠木正行や四條繩手合戦に関連した事跡が多く残されており、大東市域ではこの銅像のほかにも、北条6丁目に楠木正行を弔ったとされる十念寺や、「ハラキリ・古戦田」という小字が残されています。また、四條畷市域では楠木正行やその家来であった和田賢秀のものとの伝わる墓があり、飯盛山の北のふもとには、正行とその家臣を祀つた四條畷神社が明治23年に創建されています。(生涯学習課)



北条6丁目・十念寺前の碑